

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	29
俳誌交歓	31
9月号月評	32
惠贈句集拝見(50)	34
惠贈俳誌拝見(20)	36
特別作品「フランスの旅Ⅱ」	38
特別作品「処暑の宿」	40
琥珀集作品鑑賞	42
珊瑚集作品鑑賞	43
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
句集「山の駅」から一年	47
句集「故郷」共鳴句	48
他誌転載	50
戦の国父の蒼天(42)	52
百濟寺・五個荘吟行記	54
エッセイ「歪んだ松の木」	56

今月の一句

校倉や月光すでに太古より 桂 樟蹊子

校倉造りは奈良の正倉院や、東大寺三月堂前・唐招提寺金堂の東にもある。またノルウェーの山中で見られた教会も、峠の羊小屋も、オスロで泊まられたホテルも校倉造りであったそうである。辞書に「源氏時代以来のもの」と書かれているのを読まれた師はこれらの木の香に古代人のいのちを感じられた。

隆子

夏

塩路隆子

市となれる村史にいまも風入れる
蚊帳吊りて読みたきものに父の古書
蜘蛛の囲やいつも人ぬ交番所
蝉声に包囲されゐる蕎麦屋かな
桃啜る少女産毛を輝かせ
扇風機の風を見直しエコ生活
君メロは「G線上のアリア」夏

九月号光耀抄

塩路 隆子選

携帯電話の会話が歩く五月闇
父の日や飴色深き竹定規
蛞蝓にレッドカードや我がエリア
原発へ二里のふるさと落し文
カタカナの喃語溢るる水遊び
金魚飼ふむかし龍馬の隠れ宿
塗下駄へ素足ひんやり紅鼻緒
柿渋の臭気のぬけぬ夏座敷
緑蔭にギターの音色一ユーロ
水争ひの法度の掟いまも峽
爺さまに九九を教はる甚平の子
周山の茅葺民家朴の花
木洩日の斑や青羊歯の群生に
老鶯や何も欲しくはない暮し
選りどりの氷菓にこころリフレッシユ
ごきぶりと闘ふ朝の寡男かな
白南風や皺ひとつなき洗張り

竹内 悦子
小西 和子
宮田 香
中川すみ子
中本 吉信
鈴木 照子
藤見佳楠子
福本すみ子
松田 和子
松岡 和子
宮崎左智子
山口キミコ
山崎 里美
杉本 綾
和田 郁子
五十嵐 勉
石川かおり

白川のせせらぎもよし夏つばめ
 ほんのりと杏色して梅雨の月
 忽と出てアレグロで去る蜥蜴かな
 雨吸うて青田深々近江かな
 若竹の撓りの影やエジソン碑
 海と島と永久の語り部沖繩忌
 大池に鳩の浮巢や声澄みて
 浴衣の子八坂の塔に集ひ来る
 ひた走る白夜の原野果のなき
 節電に女将懸命団扇風
 あめんぼの軽さを残す水輪かな
 聖堂の庭を住処に瑠璃蜥蜴
 寝静まる村を窺ふ氷河かな
 老鶯に耳澄ましをり遊女像
 大南風やかくも潮疾き壇の浦
 譲り合ふ青葙原の手漕舟
 青葉風女身曝して露天湯へ
 釣忍地球は青き水の星
 非常食の入替へ時や梅雨明けて
 ヒーローの物真似上手日焼の児

伊東 和子
 伊藤 憲子
 大島 みよし
 小澤 菜美
 片岡 久美子
 桂 敦子
 川崎 利子
 紀川 和子
 木戸 宏子
 北尾 章郎
 国包 澄子
 塩路 五郎
 谷口 俊郎
 辻 知代子
 中井 登喜子
 長濱 順子
 坂上 香菜
 佐用 圭子
 田下 宮子
 森下 康子

夕されに鎮もる峽の時鳥
 衝動買ひスカイブルーの水着かな
 竹林の絹笠茸や網レース
 傘を打つ雨音ばかり蝸牛
 梅雨しとど補聴器に吾が咀嚼音
 振り翳す斧やはらかし子蠶螂
 老松の緑眩しや妙心寺
 柳に風偶然まかせ運まかせ
 仏塔に捧ぐる寶錢麦の秋
 「物忘れ外来」混みぬ走り梅雨
 釣糸の震へきらりと岩魚かな
 雷にへそ取られまい児のしぐさ
 都には食の知恵あり鱧湯引き
 暑中見舞に丹波太郎の行かな
 山里の蛍よ君も淋しいか
 杣道を敢えて歩まむ光秀忌
 方言の行き交ふ母屋夏休み
 休日の湖岸フアッション夏模様
 山小屋を早発の尾根露涼し
 県境のランドマークや緑濃き

笠井 清佑
 土井くみ子
 坂根 宏子
 新實 貞子
 井口 淳子
 和田森早苗
 栗倉 昌子
 岡 佳代子
 田中 浅子
 阪本 哲弘
 高谷 栄一
 小林 久子
 吉田 宏之
 橋本 靖子
 能勢 栄子
 藤本 秀機
 前川ユキ子
 増田 一代
 松田 洋子
 三川美代子

遠雷の前触れ徐々に雨激し
 浄蓮の滝壺煙る水飛沫
 地の匂ひ残して一過はたた神
 水羊羹切りて直方体増やす
 賀茂茄子に田楽味噌の香しき
 城跡にいくさ道あり麦の秋
 ここかしこ螢の舞のシテとワキ
 ホーホーと歌が出てくる蛍狩
 受付は巫女なり雨の七変化
 直産のトマト懐かしむかし味
 父の日や父の寡黙に近づきぬ
 七夕に五輪目指すとおばあちゃん
 湯上りの肌にはほどよき団扇風
 ひと肌を剥ぐごと汗の肌着脱ぐ
 日焼肌のミラノフアッション闊歩する
 太陽の恵みいっぱい薯の花
 塩麴食で乗り切る土用かな
 向日葵の庭たくましく子ら育つ
 千五百二頁の辞書梅雨湿り
 七夕や宇宙の渚歩みたく
 朝顔市矢張り人気の団十郎

山本 孝夫
 山崎 真義
 山本 丈夫
 吉田 希望
 渡部 法子
 池田加寿子
 板倉 安正
 伊藤 和子
 伊藤 純子
 伊庭 玲子
 大越 義雄
 大堀 賢二
 大松 一枝
 落合 晃
 西郷 慶子
 笹井 康夫
 鷺見たえ子
 関根ひろみ
 常田 創
 中村ふく子
 西田 史郎

琥珀集

抽斗

小西 和子

父の日や抽斗奥の丸眼鏡
父の日や飴色深き竹定規
短夜のしらじら明ける湖畔かな
ポニーテールの襟筋まぶし夏日影
庭師きて鉄せはしき梅雨晴間
涼風を受けて父似の怒り肩
吾が顔の写る塗盆半夏生

茅の輪

竹内 悦子

旅人と地の人和み茅の輪かな
宗匠に一輪剪れる半夏生草
驟雨なら濡れてみたしや思ひきり
婚果てて馴れぬ夏足袋脱ぎ捨つる
携帯電話の会話が歩く五月闇
あぢさゐは雨が欲しいとうなだるる
夏野菜カレーを好むをさなかな

ウインブルドン

宮田 香

蛞蝓にレッドカードや我がエリア
白服のウインブルドン芝に跳ね
岩棚を滑る清流夏の山
大皿に餃子山盛り暑気払
葉の揺れはニンフの仕業梅雨晴間
フラインド開けば縞の夕焼かな
睡蓮に集まる光掬ひたし

落し文

中川すみ子

ほろ酔ひの

鈴木 照子

原発へ二里のふるさと落し文
落柿舎に古りし雨樋濃紫陽花
紫陽花の万の光や雨上り
枇杷熟れて媪ひとりの町家かな
五月雨に詰碁の客の長居かな
これよりは市の区分なり溝浚へ
迷ひ来し団栗橋や栗の花

清流

中本 吉信

夏迎ふ

藤見佳楠子

清流を膝下におさめ貴船川床
カタカナの喃語溢るる水遊び
移る世や古物と言えぬ扇風機
田鏡の余白を消せる植田苗
青簾辺り仄かに芳しき
メロンの尻押すだけ押して売り場去る
ピアパーティ我何時しかの最古参

寺田屋の岸を住処に青大将
龍馬お龍像梅雨荒れの川へ向き
金魚飼ふむかし龍馬の隠れ宿
梅雨湿る館に河童プロフィール (黄桜ギャラリ)
ほろ酔ひの酒蔵寄席や夏夕べ (伏見)
十石舟入りし闇門梅雨青き (三栖闇門)
母と子の連弾薔薇の花明り
平凡に生きて卒寿の夏迎ふ
生涯で一度の登山富士の山
見事なる稚児の一刀長刀鉾
コンチキチ揃ひ浴衣の囃子方
塗下駄へ素足ひんやり紅鼻緒
源氏名を朱書の団扇そば処
昭和遠し麦茶を沸かす大薬缶

柿 渋

福本すみ子

片蔭に寄りて一息二息も
ほとばしる大滝仰ぎ深呼吸
柿渋の臭気のぬけぬ夏座敷
剣道に一喜一憂汗の顔
心地よき湖辺の風や蒲茂る
濃淡のあぢさゝみ群れて地にふるる
雨蛙両手を突きてお出迎

スペイン大国

松田 和子

灼熱の地球の裏やエスパニーニャ
ガウデイの色鮮やかに初夏の風
イスラムを辿る宮殿夏帽子
大国の主都マドリード夏至の朝
緑蔭にギターの音色一ユーロ
伝統の仔豚丸焼き暑を払ふ
酔ひしれる魅惑の汗やフラメンコ

大 盃

松岡 和子

驟雨来て駅まで走る迎へ傘
雨しとど土鍋で煮たる梅のジャム
酷暑なり脱原発の大決意
女流書家の揮毫涼しき蔵茶房
水争ひの法度の掟いままも峡
行水や父子二代の大盃
夏帽子追想遠きものばかり

立 葵

宮崎左智子

紫陽花のいろ滲ませて雨しとど
諭されて土用の灸に泣きたる日
ミニスカートはかせて見たし立葵
雨に遊ぶ蓮の浮葉の尺一寸
夏太り昔小町と呼べるるも
爺さまに九九を教はる甚平の子
梅雨ひと日探しものして籠りけり

周山

山口キミコ

夏あざみ

山崎 里美

光秀の城址を案内黒揚羽

黒光る光秀像に青葉風

周山の茅葺民家朴の花

逆臣の光秀城址木下闇

石積の本城跡や蛭の紐

北山を越えて山国風みどり

杉山の続く京北山滴る

老鶯

杉本 綾

神の池

和田 郁子

ガレージの軒へ真直ぐに親燕

栗の花咲きそびえたり鶯の輪

髪染めてどこへも行かず梅雨夕焼

チャペルより美しき花嫁ジュンブライド

老鶯や何も欲しくはない暮し

イケメンの庭師に絡む揚羽蝶

紫陽花や宇治十帖の寺に雨

石垣に咲く夏あざみ竹田城

木洩日の斑や青羊歯の群生に

山蛭や人を餌食と思ふなよ

街すべて泥色と化し阿蘇出水

荒梅雨や雲水読経続きける

朝顔の咲ける数記しカレンダー

原発へ沈黙は罪酷暑かな

旅人の寄り来て茅の輪くぐりけり

大口を開けて鯉寄る蓮の池

神妙に渡る飛び石蓮の池

神の池に浮かぶ楼閣風涼し (平安神宮)

石竹や万葉小径そぞろゆき

選りどりの氷菓にころりフレッシュ

峡をゆく北山杉の涼しかり

瑠璃集

合歓の花

笠井 清佑

リフォームに仮物置の夏座敷
雨晴れてまほろばの山緑濃し
梅雨晴や横たふ裸婦と睨めつ子
雨の中電車に触るる合歓の花
夕されに鎮もる峽の時鳥

(モディリアーニ裸婦画)

合歓の花

田下 宮子

朝涼や隠岐より届く塩海雲
空蟬を手に少年の反抗期
三姉妹住みし家跡合歓の花
水琴の涼しき韻に屈みけり
非常食の入換へ時や梅雨明けて

スカイブルー

土井くみ子

衝動買ひスカイブルーの水着かな
覚えたてジュースを連呼汗疹の子
扇風機を笑顔で占拠一歳児
夏服や少し派手目の色選び
メキシカンコロナビールに喉鳴らす

冷奴

森下 康子

ヒーローの物真似上手日焼の児
あるものは暇だけなのよ冷奴
親と子の意見纏まり心太
乾杯のジョッキ軽々夏の夕
扇風機の届けてくれる睡魔かな

熊野古道―果無集落―

坂根 宏子

十津川の昴の郷や青葉風
八軒の果無集落額の花
傾きし畑の元氣夏野菜
万緑やバスの往き来は週一度
竹林の絹笠昔や網レース

特別作品

フランスの旅 II

塩路 隆子

巖頭にそそる尖塔南風吹く（モンサンミシエル）

城塞のなごり王門夏灼くる

聖堂にはるかな潮干夏の雲

点灯のモンサンミシエル白夜暮れ

修道院の浮かぶ幻想夏の闇

五月闇栄華の果の牢格子（マリアントワネット幽閑）

牢獄の厚き鉄錆蒸暑き

荘麗の凱旋門や巴里に夏（パリ）

薫風に蹄のひびき騎馬婦警

汗拭ふ仏語解せぬメトロ駅

エスカルゴ巴里祭近きムツシュー店

オペラ座の放射路迷ふ炎天下

新緑を基壇に聳え巴里の塔（エッフェル塔）

エッフェル塔のスパーク短か夜の涼し

冷酒酌むグラスに浮かぶ赤シエード（ムトランルージュ）

「ムトランルージュ赤い風車」の火照りを冷ます絹扇

九月号月評

塩路 隆子

携帯電話の会話があるく五月闇

竹内 悦子

「けいたい」いえば携帯電話を差す今の世である。電車に乗ってもバスに乗っても、歩きながらも若い人の殆どが「けいたい」を弄っている昨今である。作者の見たのは「けいたい」を耳にあてて電話を掛けながら歩いている人、その光景を「会話が歩く」と表現されたことでのこの句が生きている。また季語「五月闇」により、快く思わない作者の心象を窺うことが出来るなど大いに評価したい。

父の日や鮎色深き竹定規

小西 和子

NHKの教室から句会に定着された中の一人である。ひこばえ句会のメンバーでもある。いまの定規は透明なプラスチック製であるが、お父さんの時代には竹製のものであり、使い込むと鮎色になっていた。恐らくお父様の愛用されていたものであろう。父の日に見つけた使い込んだ鮎色の定規、そう言ったところへよく気が付かれたいものと感心した。今後もう少し意欲的に作句に取り組み、若手の一人として頑張って戴きたいと期待している。

蛞蝓にレッドカードや我がエリア 宮田 香

新しく第一句集を出版されたお一人である「あとがきにいままでの作風を変えてみたい」との文面があったが無理をして変えようとすると、俳句全体が乱れてくることがある。年月を重ねることによって自然に醸された詩心を素直に謳いあげて欲しい。この句は発想が面白い。五輪を控えサッカー応援に暇もないファンも多い筈。蛞蝓にレッドカードを示す作者の俳句センスに拍手を送りたい。

原発へ二里のふるさと落し文

中川すみ子

作者のお里は滋賀県の筈。滋賀県に近い原発となると矢張り敦賀・美浜原発であろうか。誰しも故郷への思いは深く、特に生まれ育った土地への愛着は強いものがある。福島第一原発の事故を他人事とは思えない作者の不安は大きい。

昨今の情勢を考える。この句は子子孫孫に伝わる土地や次の世代を守るための子供たちの将来を鑑み「原発反対」の思いを顕わした俳句であると考ええる。季語の選択は抜群、「落し文」の措辞が申し置きたいこととして、それを強く感じさせる。作者の思いが迫る作品である。立派な作品である。